

回り道も悪くはない

岩渕千雅子

日産厚生会玉川病院皮膚科部長

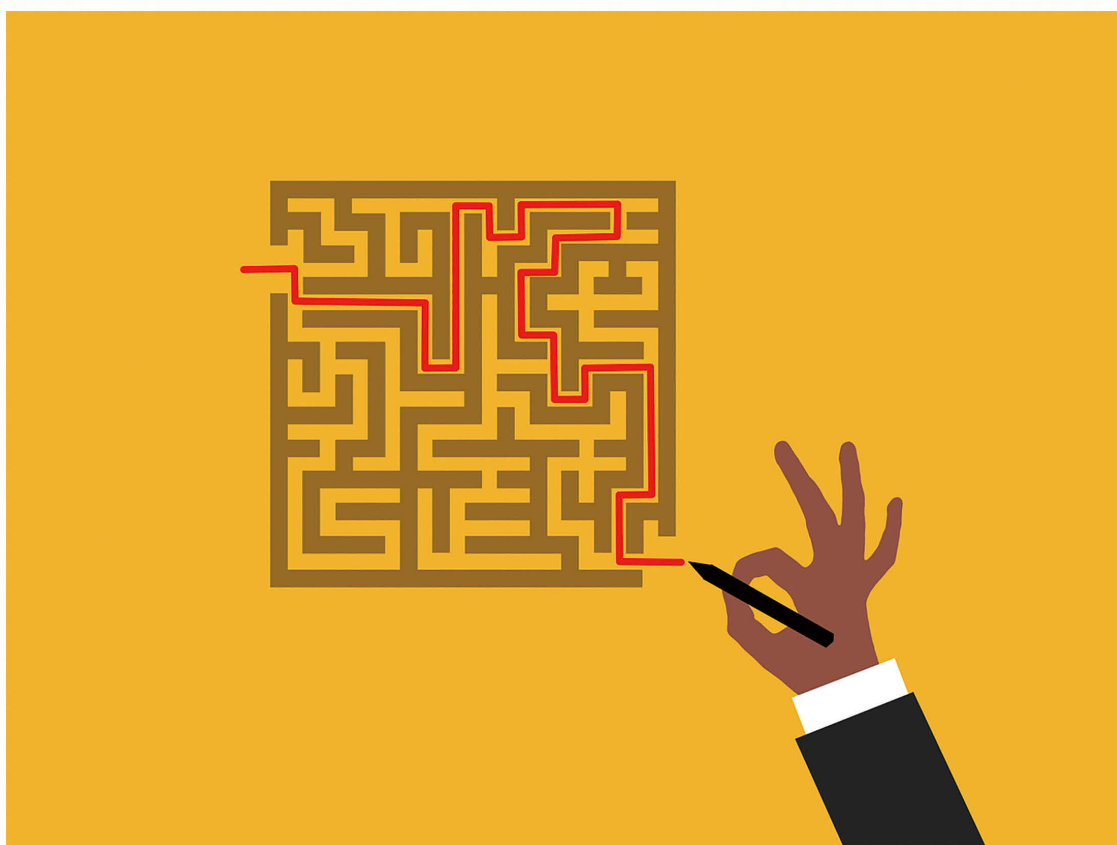
このエッセイのお話をいただいたとき、「私でいいの?」と戸惑いましたが、紆余曲折の多かった私の経験を通して、少しでも奮闘中の先生方の肩の荷が下り、ほっとしていただければと思い、お引き受けしました。

私は卒後40年も経ちますが、皮膚科医のキャリアは17年でかなり遠回りをしてきました。卒後、2年の留学を含め母校の内科に5年在職し、その後は自己免疫疾患のモデル動物を用いた研究をしたく、他大学の免疫科学研究所の研究生となりました。ちょうど、細胞免疫学の黎明期でT細胞受容体の抗原認識機構の解明、サイトカインが次々と発見された時期でした。卒後9年あまりはほぼワークでしたが、仲間と夜中までディスカッションし、愚痴をいいながらも助け合い、とにかく楽しく充実した日々を送れました。

しかし、学位取得後は出産、子育て、主人の留学など状況が変わるたびに研究生、大学院生、時限つき研究員と身分が変わり、長い間不安定な立場でした。楽天的な性格ではありませんが先のことはほとんど考えず、夜中までの細胞のソーティング、マウスの系統維持などたいへんな日々を過ごしつつも、自由で活気溢れる研究所の仕事が充実していたため15年あまり基礎にいました。しかし、基礎でさらにポジションを得ることは並大抵の努力ではできないことを痛感していた中、大学院生の皮膚樹状細胞の解析を手伝い、皮膚科でいままでのキャリアを生かせると考え、転向を決意しました。母校の皮膚科医局の門を叩いたときには卒後20数年が経っていました。初心者同然でしたが医局は快く受け入れてくれ、皮膚科医を目指すことができました。

何よりも皮膚科は面白いです。また、基礎にいたときに発見された物質が乾癬やアトピー性皮膚炎の画期的治療薬に応用されたことは感動的で、基礎研究の重要性を再認識できました。これからも問題意識をもち続け、治療にあたりたいと思います。

さて、ワークライフバランスについてですが、女性医師が出産、子育てを経験しながら仕事を継続することは今後さらに重要になります。仕事と家庭の両立、同僚への遠慮など



で悩み離職していくことも少なくありませんが、回り道をしてどのような形でも仕事を継続することが大切だと思います。「どうか希望をもって医師を続けてください。短期間でもよいので研究に携わることでさらに皮膚科は面白くなりますよ」と伝えたいです。そして、男女問わず、若い医師にとって働きやすく、わくわくするような環境をつくれるよう努力したいと思います。